HK

柏原兵三作品集 5

潮出版社

柏原兵三作品集　第五巻

昭和四十八年六月二十日　印刷
昭和四十八年六月二十五日　発行

著　者　柏原兵三
装幀者　栃折久美子
発行者　島津矩久
発行所　潮出版社
東京都新宿区南元町一四―一
電話　三三七―七二一一　〒一六〇
振替　東京　六一〇九〇

印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　鈴木製本所

第五巻　目　次

仮りの栖—ベルリン冬物語……5
ベルリン漂泊……151
解　説　留学神話の打破……小堀桂一郎 327

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

柏原兵三作品集　第五巻

仮りの栖——ベルリン冬物語

——一九六三年から六四年にかけての冬——

第一章

ベルリンでの下宿は日本をたつ前にすでに決っていた。その点で自分は実に恵まれていると私は思っていた。留学地での下宿捜しの苦労話は、散々聞かされていたからである。ベルリンの住宅事情はほかの都市に比べてずっとよいとは聞いていたものの、しかし見知らぬ異郷の地で住まいを捜すのは、どんな場合でもそんなに簡単ではないだろう。だからベルリンに留学していて、私と入れ替りに帰国するという高校時代の堀という友人の兄のことを小耳にはさんだ時、私はすぐにその友人に電話をかけてみて、もしその下宿がいいところだったら、私に引き継がせてもらえないか、兄さんにそう頼んでみてくれないかと申し込んだのである。友人はすぐ手紙を書くことを約束してくれた。

二週間位して、友人から電話がかかって来た。ベルリンから返事が来て、私が申込んだことを引受けた旨報せて来たから、ドイツに着いたら直接連絡をとって欲しいという報せだった。

それから十日位して、私はドイツの土を踏んだのだが、最初の二ヵ月はベルリンでなしにオーストリアとの国境沿いにあるバート・ザルツハルというバイエルンの小さな温泉町で過すことになっていた。政府交換留学生に義務として課せられているドイツ語研修を、私はその町にあるゲーテ・インスティトゥートの支所で受けることになっていたからである。

この温泉町に着いて三日程してから、私は友人の兄の堀保氏にあてて短い連絡の手紙を書いた。折返し来た返事には——

弟から御希望を聞いて委細承知している。自分はあなたがベルリンに入るという十月末より一週間位前にアメリカ経由で帰国するつもりでいるので、あなたにお目にかかることはできないが、あなたのことはよく下宿のおばさんにも頼んでおくから、どうか安心して欲しいと書いてあり、弟を通じて大体のところは御承知と思うが、と断わって下宿の条件が次のように詳しく記してあった。

家賃は一〇六マルクで、この中には暖房費、ガス、電気代も含まれています。従って安心して kochen（食事を作るの意）して下さい。食器は貸してくれ、台所へ運

んでおけば洗ってくれます。またお客を招待する時には、必要な食器を用立ててくれますから、その旨告げて、遠慮なく招待したらよいと思います。

洗濯代は別払いになります。個別的にいくらか知りませんが、その都度おばさんが請求してくれます。特に安くはないが、店に頼むより安く、清潔だと思います。だいたい一ヵ月に十〜十五マルク位ではないでしょうか。

部屋は大きくないのですが、水道が入っています。ただしお湯は出ません。

尚、前にいた日本人のピアニストが置いて行った小さなお釜があって、お米がかなりおいしく炊けます。この家の特権です。またおばさんはもとオペラ歌手で、インテリですから、色々な点で頼りになるのではないかと思います。

そして最後に、下宿のありかを示す略図がしたためてあった。西ベルリンの中央駅ツオー駅から歩いて十五分のところらしく、私のまだ乏しいベルリンに関する知識に照らしてみても、それがベルリンの中心地に位置していることは容易に想像できた。西ベルリンで一番繁華な通りであるクアフュルステンダムから歩いて五分位のところにある大きなアパートの中庭に面した棟の三階にある住まいの一室が、私が借り受けることに決った下宿であった。つまり東京でいえば、銀座か京橋あたりの裏通りに住むことになるわけだな、と私は考え自分を待ち受けている未知のベルリンの下町の生活に対していささかの興奮を覚えないではいられなかった。

尚その手紙には追伸として次のような注意が書いてあった。

ベルリンに到着する日時は、あらかじめおばさんに報せておいた方がいいでしょう。というのはこの住居はおばさんの一人棲まいで、おばさんは年中かならずいるというわけではないからです。駅なり空港なりに着いたら、早速電話をするとよいかも知れません。特に夜間はかならず電話をしておくべきです。そうでないと外のドアが閉まってしまいますから。電話番号は91—93—98です。

私はこの懇切な手紙に対して早速お礼状を書いた。折り返し堀保氏から葉書が届いた。それには私の手紙に対する簡単なお礼の言葉に続いて次のような文面がこまかい字で記されていた。

あれからバッハマンおばさんと貴兄のことについて最終的な打ち合わせをしました。そして彼女と相談の結果、貴兄もおばさんも相知らぬ仲、それに貴兄もまだ部屋を見たこともないゆえ、一ヵ月を probieren の期間にしま

しょう、ということにしました、ですから、もしもそのあいだにもっといいところがあったら、引越していいわけです。ゼメスター（学期）終了後三月になると下宿を見つけ易くなります。

尚おばさんには一筆簡単に挨拶状を書いておくといいでしょう（名前は Frau Katharina Bachmann）。いろいろな人から下宿の申込みがあるらしいのですが、彼女は貴兄の来られるのを大変楽しみにしているようです。彼女は文学愛好家なので、貴兄がドイツ文学を専攻しておられることを知って、いい話し相手ができた、と喜んでいました。何しろ僕は機械屋なので、文学の方はさっぱり駄目なのです。尚到着の日時など、詳細分り次第、報せて欲しいとのこと。僕の出発は十月の十九日を予定していますが、それまでに分ればそれの方がいいといっていました。それからお問合せのあった十月分の室代は全部僕が払いますから、心配しないで下さい。

十一月から三月までドイツは昼が短かく、旅にも出られませんから、そちらにおられるあいだにせいぜい週末を利用して、オーストリア、バイエルンの森や湖などを歩きまわるといいと思います。ではお元気で、さようなら。

私はこの葉書を何度か読み直しているうちに、だんだん不安になって来た。いろいろな人から下宿の申込みがあるというのも気がかりだったし、一ヵ月を probieren の期間、つまり試験期間にしたいというおばさんの提案も、私にはむしろ不安の種となった。要するにその下宿は地の利が格別にいいし、値段も頃合なので、きっと借り手が降るようにあるのだ。壁が出来てから人口が減ってしばらくは住宅事情のよかったというベルリンも、最近はとみに事情が悪化しているらしいから特にそうなのだろう。（私が東京で聞かされていた、ベルリンの住宅事情に関する情報は二、三年前のものであるらしいことが、ドイツに来てみて分って来たのである）だからやっぱり一度ベルリンまで出かけて行って、下宿のおばさんに挨拶をし、手付金位払って、かならず借りますという意思表示をちゃんとしておいた方がいいのかも知れない。それに堀さんにも直接会ってお礼をいい、ベルリンでの生活についてもいろいろと助言を仰いだ方が、これからのちのために何かと便利かも知れない、そんなことを私は考え始めていたのである。

私はすぐに不安になる質だった。それは私の性格の顕著な傾向の一つだった。私はそれを知っていたから、一方でその不安にすぐ乗じられないように用心するすべも心得ていた。もう少し様子をみよう、と私は自分にいい聞かせた。もう借りることに決っている下宿を確認するために、何も高い交通費を使って、わざわざベルリンまで行くことはないだろう。手付金を払うなら郵便為替で送っても済むことではないか。すると私の心は、下宿を確認するだけでなく、

ベルリンそのものを下検分しておきたいのだ、と主張しようとした。本格的にそこで留学生活を始める前に、その土地をちょっと見ておくことは無駄ではあるまい。精神的にも安心感が得られるし、今ここで将来の計画を樹てる時にも、その土地をちょっと知っているのと知らないのとではずいぶん違って来るのではあるまいか。そういえば今私と一緒にバート・ザルツハルのゲーテ・インスティトゥートのドイツ語講座を受講している留学生の大部分は、すでにここへ来る前に、それぞれ自分たちの留学する先を訪れ、いろいろな手続きを済ませて来ている。もしかするとそれをしていない私は呑気過ぎるのかも知れないのだ……

しかし私ははやる心をじっと抑え、ともかく堀氏に勧められたように、下宿のおばさんに挨拶状をしたためることにした。私は初めて手紙を書くのに葉書では失礼にあたるのではないかという律義な考慮から、封書の手紙を書くことにした。すると折返し、バッハマンおばさんからも封書の返事が届いた。

封を切ってみるとほんのりと香水の匂いの漂う青い便箋の手紙が出て来た。男が書いたような、勢いのよい、しかしなかなか美しい筆跡で、簡単ながら要領のよいお礼の言葉がそこには認められてあり、あなたといずれお目にかかれるのを楽しみにしている、と書いてあった。

二十日も経つと、私はゲーテ・インスティトゥートのドイツ語講習にすっかり飽きて来た。それで土曜日曜を利用して、オーストリアのいくつかの町を訪ねたり、バイエルンの田舎へ出かけたりした。しかし、それらの小旅行はたしかに私を満足させはしたものの、肝腎かなめのベルリン、私の留学の地ベルリンの土をまだ一度も踏んだことがないという意識が、相変らず私の心を何か空虚にしていた。私はいつの間にか、ベルリンに、未だ見ぬ市ベルリンに憧れを燃やしていた。私はすぐ物事に恋い焦がれ、憧れを覚える質だった。私はベルリンと共に、未だ見ぬ私の住いにも恋心を覚えていた……

ある夜見た夢が、私に一度ベルリンを下検分することを決心させた。それはこんな夢だった。

――ベルリン入りをしてすぐ借りることに決っていた下宿を訪ねてみると、ほかの下宿人がもう入っていて、バッハマンおばさんは私に貸す約束をした覚えはないという。仕方なしに私は安ホテルに泊って、毎日毎日下宿捜しに奔走するが、いつまで経っても下宿が見つからない。そのうちに持金が乏しくなって来る。仕方なしに日本に送金を依頼するが金策ができないのか妻はなかなか送ってくれない……

それは、前の晩にビヤホールで日本人の留学生と下宿のことを話しあったために見た夢らしかった。その時居合わせた三人の日本人留学生のうち、二人は大学の寮に住むことにしていた。もう一人は、私と同じように入れ替りに帰国する先輩のあとを借り受けることにしていたが、ゲー

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

テ・インスティトゥートへ来る前に、ちゃんとその下宿を訪れ、十一月分の部屋代を払って来ているという周到さだった。彼の話によるとたいていの大学町では余程遠い郊外へ出れば別だが、市内に下宿を新たに捜すことは至難の業で、部屋が見つからないでパンジオン住いを余儀なくされている学生が何人となくいるそうだった。彼の留学するテュービンゲンでも彼が行った時に女子学生が部屋を求むというプラカードを首から下げて町なかを歩いていたそうだった。大学を各学期ごとに変ることのできるドイツの大学制度も、住いの点でかなり行き詰まっていて、ドイツの大学生は、大学を移る場合には、たいてい新学期の始まる二ヵ月か三ヵ月先から新しい大学の所在地の宿捜しを始めるが、みんな下宿を見つけるまでには非常に難渋するらしい、というのであった。そんな話を聞いているうちに私は再び不安になってしまったのだ。堀氏は十月の十九日にベルリンを引き払うといっていたから、私がゲーテ・インスティトゥートのドイツ語講座を修えてベルリンに入るまでには、半月近くの空白期間ができてしまう。そのあいだに下宿の女主人が心変りしてしまって、ほかの希望者に貸してしまったらどうしよう、そういうこともあり得ないわけではない、などと考え出していたのである。

とうとう私は十月の初めに、土、日曜日を利用してベルリンへ出かける決心をした。私の留学地ベルリンを下検分し、精神的な安らぎを得よう、下宿のおばさんにも会って、もし必要ならば十一月分の部屋代も払って来よう、そうすればベルリンに入るまでのこれからの一ヵ月近い期間を安心して過すことができる。それにそうしておけば、十月末にゲーテ・インスティトゥートが終ってすぐにベルリンに行かなくても、大学が始まる十一月までの約十日間ばかりに、いったんベルリンに入ってしまうとなかなか訪れることができないに違いない西ドイツの町々を訪ねて歩けるわけだ。少くともベルリンに入る前にぜひ寄ってくれといっている親しい友人の山西のいるマールブルクをゆっくりと訪れ、そこに二、三日滞在してから安心してベルリンに入れるというものだ。そんな理由を並べ立て私は高い交通費を払ってでもベルリンにひとまず行ってみる必要があるという結論を引き出したのである。

私はたちまち善は急げの心境となり、その次の週の土曜日の夜行で、ミュンヘンからベルリンに汽車で入る決心をした。そして早速堀氏に手紙を書いて、彼とバッハマンおばさんの都合を確かめることにした。

折返し、次のような葉書の返事が来た。

ベルリンにお出になるというお便りを頂きました。バッハマンおばさんも喜んでおります。十三日にみんなで新たな知合いになりましょう。

今のところ確定したわけではないのですが、小生十三日の午後からふさがる公算が強く、従って多分午前中し

かお会いできないと思います。なお、その夜から二、三日ベルリンを留守にする予定でいます。

ミュンヘンからの夜行は八時二十八分にベルリンのツオー駅に着きますから、小生その時ツオー駅の改札口に行きます。改札口を出たところで待っています。もっとも列車がひどく遅れた場合には帰宅しますから、電話をして下さい。

一緒に朝御飯を食べましょう。変更がありましたら御一報下さい。ではさようなら。

土曜日の午後私は、バート・ザルツハルでそれまでに読んだ新聞、雑誌などのがらくたを詰めた黒革の大きなトランクを持って汽車でミュンヘンへ向かった。そんな新聞、雑誌の類いは捨ててしまえばよさそうなものだったが、後日何かの資料として役立つような気がして捨てかねる気持が強かったので、もう着なくなった夏服の上下と共に、バッハマン家に私の代りとして預かってもらおうと思ったのである。そのほかにその黒革のトランクにはモーゼル・ワインが一本と、叔母から餞別にもらった色合いのよい絹のスカーフが一枚入っていた。金曜日に大枚十二マルクをはたいて買ったモーゼル・ワインは堀氏にいろいろ世話になったので感謝の意を籠めて進呈しよう、それから絹のスカーフは、バッハマンおばさんに初対面の挨拶に贈ろうと思ったのである。

西ベルリンの中央駅ツオー駅のくすんだプラットホームに足を一歩踏みおろした時、私はいよいよ留学の目的地に着いたのだというある種の感動を抑えることができなかった。

それはいかにも古めかしい駅だった。私はただちに手荷物車へ行って、黒革のトランクを受け取ると、プラットホームを中央の階段口へ歩き出した。

自分がまだ幼かった頃、父はこのトランクを持って、この駅のこのプラットホームをやはり歩いたことがあるに違いない、とトランクを提げて歩きながら私はぼんやりと考えていた。そのトランクは私を母の胎内に残してヨーロッパに留学した父が前半の留学地であったイギリスで買い求めたトランクだったから、彼が後半の二年を過すためにベルリンに移ってからも、旅行の折などは始終使っていたに違いない。だからそのトランクを持ってこのプラットホームを歩いたということも充分に考えられるだろうと思ったのである。

そのトランクは戦争中疎開地に持っていったので、戦災にも免れ、父の遺品として大切にしてあったために、未だにどこといっておかしなところがない。皮は艶こそなくなっているがまだ立派なもので、金具も頑丈そのものだった。皮の表面には父の泊ったヨーロッパの各地のホテルのラベルが貼ってあった。それらのラベルは私の幼年時代を通し

て未だ見たことのない異国への憧れを育てたものだった。しかしそれらのラベルはどれもこれも安宿、大都市の場末の安宿のものばかりらしかった。だからヨーロッパの事情に通じた人たちには恥ずかしくてこのトランクは見せられない、と父は母にある時話したことがあるそうだった。

階段を降りると、改札口のあたりに、二十人位の出迎え人が犇いているのが目に入った。私は今降りた客たちのしんがりであった。私はみんなのうしろに従ってゆっくりと歩いていた。改札口を出るなり、出迎えに来ている人たちと抱き合う夫婦や恋人同士らしい幾組もの老若男女がいた。私はそこに出迎えている人々の中に私の妻がいないことをちょっと寂しく感じた。

改札口に近づいた時ようやく私は友人の兄の堀氏らしい日本人が改札口から大分離れた位置に独りぽつんと立っているのに気づいた。

改札口を出ると私はまっすぐ彼のところへ歩を運んだ。

「堀さんですね」と私は彼の前に立っていった。

「やあ」と彼は初めて気づいたようにいった。

「どうもいろいろお世話になって申訳ありません。わざわざお迎えまでして頂いて恐縮です」

「いや、いや」と堀氏は言葉寡なに答えた。

「じゃあ、ぼつぼつ出かけましょうか」

彼は日本人としても小柄な方だった。もしかすると私の肩までしかないかも知れない。

「出かける前に、実君から電話を頂いて、みんな元気にしているから、よろしく伝えて欲しいということでした」

「そうですか」と堀氏は余り関心がなさそうにいった。

もしかすると、いやきっと堀氏はそれよりもずっと最近に、東京の両親や兄弟から手紙を受けとっているに違いない、何しろ自分が東京を立ってから二ヵ月近く経っているのだから。そう思うと私には今の自分の挨拶の言葉がひどく間の抜けたものに思えて来た。

私たちは余り綺麗とはいえない駅のホームを抜けて駅前の広場に出た。空は重たくどんよりと曇っていた。

「タクシーを拾ってもいいけれど、歩いてもわけないから歩きましょう」

そういってから堀氏はふと気づいたように、

「そのトランクは重いんですか。余り重いんだったら、タクシーを拾った方がいいかも知れないけれど」

「いいえ、大して重くありません」

そういって私は後悔した。実のところ私のトランクはかなり重かったのだ。ただタクシーに乗るのが面倒に思われただけだったのだ。私は何でも気に病み易い質だった。この生来の傾向は私の人生の重荷といえた。たとえばタクシーに乗ったら、タクシー代は誰が払うべきかという問題が起るだろう。もちろん私が払うのに吝かではないが、もしも友人の兄さんが払うといいはったら、彼に敬意を表して払ってもらってもいいだろうか、いや払ってもらうべきだ

ろうか、それとも飽くまで辞退すべきであろうか、今から予想されるそんな問題が今私にはとてつもなく大きくなって見え、そうした問題にかかわりあいになるのが恐ろしかったのだ。これはもしかすると、昔高校時代に陥ったことのある神経衰弱が再発する兆しかも知れなかった。もし異国の地で神経衰弱になったら、と私は考えていた。私にはその苦境を乗り切る力があるだろうか……

「それじゃあ、歩くことにしましょう」

私たちは横断歩道を渡って、ヨアヒムスターラー通りの歩道を歩いた。日曜日なのでどの店もみんな閉っている。

やがて大きなレストランの前に来た。

「ここが有名なアシンガーという店です」

堀氏が説明するようにいった。

「大しておいしくないけれど、店の半分がセルフ・サーヴィスになっていて安く食べられるから、覚えておいた方がいいかも知れません」

アシンガーという店の名前は聞き覚えがあった。私はどうして聞き覚えがあるのか思い起そうと努め、まもなくバート・ザルツハルで読んだローベルト・ヴァルザーというベルリンにも十年近く住んだことのあるスイスの作家の小品集に、このベルリンの古い、愛すべき大衆レストランを讃えたエッセイが収められていたことを思い出した。それから彼が晩年を精神の闇に包まれて癲癇病院で過した作家であることも一緒に思い出してしまった。

「ブレヒトもよくさっきの店で食べたそうですよ」とその店を通り過ぎてしばらくしてから堀氏がいった。

「ほう」

「ブレヒトといえば、ベルリンに住んでいるお陰でね、僕も東ベルリンのベルリーナー・アンサンブルで大分ブレヒトの作品を見ましたよ」

「演劇がお好きなんですか」

「特に好きということもないが、土、日曜などはほかにすることがないのでかなりよく方々の劇場に通いましたよ。その点でベルリンは便利な市です。何しろ東ベルリンと西ベルリンと二つの都市を抱え込んでいるわけだから、演劇も両方の世界の演し物が見られてね」

「東ベルリンには二十四時間なら入れるのだそうですね」と、私は汽車の中で、西ドイツから東ドイツに入る時と、東ドイツから西ベルリンに入る時の二度にわたって、無表情な東ドイツの人民警官の厳重極まる検査を受けた際の不気味な気持を生々しく思い出しながらいった。

「そうです」と堀氏は答えた。

「入れないのは西ベルリンの市民だけです。東ベルリンに訪ねたい人を持っている人は西ベルリン市民に一番たくさんいるわけですから、これは残酷な仕組ですよ」

「どこから東ベルリンに入るのですか」

「電車の場合はフリードリヒ・シュトラーセからです。今のツオー駅からバーンに乗って十分足らずのところだから、

フラウ・バッハマンの家は非常に便利なところにあるわけです」

フラウ・バッハマン、ああ、バッハマンおばさんのことだな、と私は思った。堀氏がいつも手紙の中でバッハマンおばさんと書いて来ていたので、いつしか私も心の中でそう呼ぶことに慣れ親しんでいたのである。

私は重いトランクを持つ手を右手から左手に変えた。堀氏に気づかれないために、それをなるべく目立たないようにした。

十字路に来ると、堀氏は角の喫茶店を指して、

「これが有名なカフェー・グランツラーという喫茶店です」といった。

堀氏が立ち止まったので、私はトランクを歩道の甃の上に置いた。

「この通りがクアフュルステンダムです。向うに見えるのがヴィルヘルム皇帝記念教会です」

堀氏が示してくれた左手に、すでに写真で見たことのあるヴィルヘルム皇帝記念教会が見えた。戦争で破壊された教会の塔の残骸をそのまま記念のために残し、その隣りに蜂の巣の小さな孔のような形の小孔に紫の色ガラスをはめこんだ前衛的な建築の六角形の塔と礼拝堂が建っているのだが、古い教会の残骸と前衛建築とが奇妙な調和を保っているように思われた。

横断歩道を渡って右へ折れた。クアフュルステンダムの広い歩道には、歩道の真中にボックス型のショー・ケースが、とびとびに並んでいる。

「こういうショー・ケースはベルリンだけのものだそうですよ」と堀氏はいった。

二番目の角を左に曲った。左側にストリップの看板を出したキャバレーがある。

「このあたりにはね、夜になると街の女が立ちますよ」

「どんな女たちですか」

「とって喰われてしまいそうな大女ばかりだな」と堀氏は苦笑いするようにいった。

大きな通りを一つ渡ると五つの通りが合流している広場があった。孔雀広場という名前のついているその広場を越えて左手に見える古い大きな六階建の建物がバッハマンおばさんの住いのあるアパートだった。その建物の一階におさまっている煙草屋、雑貨屋、美容院の前を過ぎると、うっかりすると見すごしてしまいそうな小さな入口が現われた。それがそのアパートの中庭に通じる通路の入口であった。

「この入口のドアが夜になると管理人に鍵をかけられてしまうんです。一度合鍵を忘れてね、誰かが開けるのを待って二時間もうろうろしたことがありましたよ」と堀氏はいった。

ドアは重い鉄製の扉だった。通路は薄暗かったが、暖房が効いていて暖かった。しばらく歩くとまた鉄製のドアの

前に来た。そのドアを開けると中庭だった。

中庭はひどく殺風景だった。樹木は一本もないし、花壇がところどころにしつらえてあるが、花は枯れてしまっている。ちょっと獄舎の中庭を思わせるような庭だった。上を見上げるとどんよりと曇った空は四角形にしか見えなかった。私は胸に圧迫感を覚えた。

中庭を横切ると、また鉄製のドアを開けて向う側の棟の中に入った。焼けた建物と見えて壁には火が這いまわった跡が見られた。黒く変色していたところ剝げ落ちているのだ。階段の手摺りも、火に熱せられて崩れたと思われる痕があり、段も角が欠け落ちていたりする。

三階までトランクを持って上るのはちょっと辛かった。

三階の右側のドアの前に立って、堀氏はオーバーのポケットをまさぐっていたが、やがて大きな鍵束を裸のまま出した。

ドアの右手に、Frau Katharina Bachmann という標札が壁に塡め込まれている。銅板に装飾文字で彫りつけられた洒落た標札だ。堀氏は三つの穴に三種類の鍵を次々に入れた。なかなか厳重な戸閉まりである。ようやくドアが開くと、

「さあ」といって堀氏は私を招じ入れた。

一間半位の広い廊下で、臙脂色のカーペットが敷いてある。左手の衣裳かけに、女物のオーバーと帽子がかかっている。建物とちがって中は手入れが行届いているようだった。

「オーバーをここへかけて下さい」

オーバーを脱ぎながら小さな声で堀氏がいった。私は堀氏のオーバーのかかった掛鉤のとなりの掛鉤に自分のオーバーをかけた。

廊下は暖房が程よく効いていて心地よかった。堀氏は廊下を静かに歩き、右手の三つ目のドアの前で立ち止まり、そっとドアを開けた。

「どうぞ」と彼はいった。「ここです」

中へ入ってみて、私はちょっとがっかりした。部屋が私の予想以上に小さかったからである。私は堀氏が手紙に「部屋は大きくないが」と書いて来たのも忘れて、いつの間にか勝手に、広い、明るい感じの部屋を想像していたのだった。いつも僕の予想はこんな風に簡単に裏切られてしまう、と私は心の中でひそかに独りごちた。

「どうぞ」といって、堀氏は私にソファーを勧めた。私はトランクを隅に置いて、そこへ坐ることにした。

「ちょっとお湯を沸かして来ます」

そういって、堀氏はドアを開けて出て行きかけたが、ふと気づいたように私の方を向き直り、

「朝飯はまだですね」と確かめた。

「ええ」

「簡単に用意して来ますから、一緒に食べましょう」

「どうも済みません」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com